

親子再生 ～虐待を乗り越えるために～

講師・佐伯 裕子 氏

三鷹市北野ハピネスセンターくるみ幼児園長、(福)子どもの虐待防止センター評議委員。著書に「親子再生」「三鷹市子ども家庭支援ネットワーク」「子育て支援&子育てネットワーク」



人と関わる時に大切にしたいこと

泣きたいほどつらい時に、助けてくれるだろう誰かの顔がふっと思い浮かびますか？思い浮かんだ人は、心にパワーがあり、心が健康です。それでは、その人に何をして欲しいですか？話を聴いてもらいたくないですか？自分だったらこうしてもらいたいということをする、それが支援の基本です。

いらだったことがあった時には、自分の思いを3回位話すとクールダウンするものです。しかし、その時に意見を述べられったり否定されたりすると更にいらだってしまいます。

聴き方のポイントとして「うん、うんと頷いて聴く」「その人の言葉を繰り返す」「その人の短い文章をまとめて返す」という3つがあります。その3つに共通して言えることは、決して自分の考えを言わないことです。保育者や先生は職業意識からか、「是非教えてあげなくっちゃ」という思いで言ってしまうがちです。

そして、誰も話す相手がいないと孤独に思っている人がいるということを忘れてはいけません。表面上にこやかにしていても、心には誰にも言えない何かをもっている人がいるのです。

支援とは

たとえどのような人でも、人としての良い力を持っています。その力が上手く出せないということに課題があるのです。支援とは、本来ある力を発揮できるように支えることです。援助とは、不足しているものを補い助けることです。

これまで、支援とは特別なことをすると考えがちでした。実は、子育て中の家庭支援の対象の捉え方は、相手が知りたこと、困っていること、悩んでいることやしてほしいことなどすべてが対象となります。

親支援をとよく言われていますが、これは、子どもの育ちを保障するために家庭支援を行っているのです。家庭環境が安定していることが子どもの健やかな成長につながります。親子関係を確立し家族が安心して暮らせる家庭が営まれるようにすることが家庭支援です。

ニーズの理解

発育発達、食事、遊び、就園就学、教育、療育、障害、児

童虐待、いじめ、不登校、非行、家庭内暴力、経済、夫婦関係、DV、薬物、病気などにおいては様々なニーズがあります。

例えば、食事ですが、単に偏食をしているということだけでなく、口の周りに過敏性をもっている子どももいます。離乳食や食事がスムーズにいかない子どもには感覚の問題も視野に入れて考えることが必要です。また、最近のお母さんの特徴ですが、自分で判断することが苦手で誰かに尋ねて確認をもらってからでないと行動できない人がいます。例えば、離乳食の与え方でも、本には「一日に1さじずつ増やしていきましょう」という説明はあるのですが、「これで終わりです」という説明がなければ、どこまで続ければよいのか不安になってしまいます。あるお母さんですが、与える摂取量の判断ができず、不安で毎日電話をかけてきて、話を聞いてもらい「それでいい」と言われてはじめて安心する方もいました。

DVでは、直接子どもに暴力をふるわなくても、父親が母親に対して暴力をふるうのを見て育つことで、「僕が悪い子だからお父さんが暴力をふるう。僕が悪い子だからお母さんを助けてあげられない」と自尊感情がぼろぼろになってしまうのです。それは虐待にほかなりません。

DVから逃げてきた人は、また帰ってしまう傾向があります。子どもを連れて逃げてきた場合には、「子どもを連れて逃げてきてくれてありがとう。だけど、戻ろうと思うのならあなただけが戻ってください。子どもを返すわけにはいきません。私たちは子どもを守らなければならないのです」と言います。私たちの支援は子どもの育ちを支えるために行っているからです。

薬物依存症の母親もいます。また、心の病気で、カウンセリングや治療等、サポートをしなければならない人も増えてきています。

表に見えるニーズだけでなく、見えないニーズも重要です。私たちが見えているのは、一面でしかありません。しかし、そこから見つけてあげなければなりません。なぜ連携が必要か。様々な面が見え、隠れたニーズが見えるからなのです。

子どもの気になる行動

前後の脈略がなく、理解できない行動をとる子どもがいます。発達障害の子どもが示す症状として捉えることができる場合がありますが、被虐待児も似た症状が見られます。特に小さ

い場合はその区別が難しいです。疑問をもったら、できるだけ早く専門家に見てもらうことが大切です。愛着関係が育つ時期に、著しく不適切な関わり方をすることで、愛着障害がおこり、対人行動の問題へと繋がります。

虐待が子どもに及ぼす影響は、「生命の危機」「知的発育に影響する危機」「精神的障害の危機」「繰り返し虐待を受ける危機」「他者や自分を傷つける危機」があり、どれもその子どもに多大な影響を及ぼします。

ところで、虐待をしてしまっているお母さんは、ほぼ全員が育ってくる中で自分が同じことを受けてきています。そんなお母さんに対して「あなたがダメ」とは言えません。「お母さん、頑張ってきたね。よく今まで生きてきてくれたね。えらかったわ」と声をかけています。

虐待を受けた子どもの中で、大人になって虐待する人は約3分の1です。後の3分の2は克服しています。それは、どんな大人と出会うかです。「こんなことをしてしまうあなたの行動には原因があるんだよね。どんなことをしても大好きだよ」とすべてを受けとめてもらうことで立ち直っていきます。だから、私たちが早い時期にサポートして断ち切ってあげなければならないのです。

貧困が原因と言われることもありますが、裕福な家庭でもおこります。要は精神的なところで満たされているかどうかというところを見る必要があります。

保護者の不適切な関わり方を指摘すると、「しついです」と反論されることが多々あります。それは大人の言い分であり、子どもの視点から見てその行為がどういものなのかが問題なのです。

ニーズを捉えたら

ケースを一人で抱えこまず、地域にある様々な機関と一緒に支援を行っていきましょう。そのためには、どんなところがあるのか、どこに相談したらよいのか、誰に伝えればうまく機能するのか、機関の役割や機能を知っておくことが大切です。

相談を受けた時に、他の機関と連携した方がよいと判断した場合でも、即答して決めつけないことにしています。「〇〇で困っているのね。じゃあ、△△で□□ができるって聞いたことがあるから、聞いてみるといいわね。△△にできるかどうか聞いてみていい？」と相手の意向を尋ねると「どうぞお願いします」という答えが返ってきます。そうすることで次の機関へこのケースについて話をしても構わないという確認がとれるからです。

次の機関を紹介する時はできるだけ同行することになっています。一緒にいるだけで安心感を与え、気持ちを支えることができます。また、そのような方は得てして話をするのが苦手です。相談の内容を担当者にしっかりと伝える手助けもできます。

子どもと家庭を取り巻く問題は多様です。些細なもの背景には深刻な問題が隠されている場合も多いのです。子どもと家庭の状況を、「身体機能」「精神心理」「社会家庭」的な要因から捉えることが必要ですし、「子ども」「保護者」「保育者」の視点から見ていくことも重要です。それはネットワ

ークを使わないとできないことです。

支援には、園で話を聴いてあげたりする身近な支援と、専門的・広域的な支援とがあります。ネットワークの中で自分の役割は何なのかを整理してみてください。

子どもや親へ関わる心構えとしては、相手の話にしっかりと耳を傾け、誠実に聴くことです。話してみようという気持ちを受けとめ、誰がどのように困っているのかを念頭に置き、回答を用意したり、行動を非難したり、指示的に行動を促さないことです。そして、自分の価値観・倫理観で相手を判断・評価してはいけません。あるがままの姿や気持ちを受け止める姿勢が大切なのです。

支援を必要としている子育て中の家庭に関わるには、こちらから寄り添っていくことが大切です。自己申請する人だけに手をさしのべるのではダメなのです。そして、何も無い時から関係づくりをしておくことです。

私たちが出会う人（子ども）

どの人も、個人の心とからだは歴史・時代・文化・社会の影響を受けています。互いに尊重しあいながら、どのような関わり方が最良かを常に全身で受け止めて考えましょう。そして、子どものためにするということを忘れてはいけません。全面的に認めてくれる人と出会えた時、人は次に進むことができます。そんな関係ができていれば、どんなに厳しいことを伝えたとしても関係は崩れることはありません。どれだけその人の心に響くかが重要です。大人も変われます。子どもの何倍もかかりますが、変わることができるのです。「よくここにきてくれたね」「あなたは少しも悪くないのよ。あなたのせいじゃない」「あなたのことを本当に支えたいと思っているのよ」「どんな試し行動をされても決して見捨てない。一緒に歩くよ」という思いを伝えることが大切です。何かをしてあげるのではなく、一緒にいてあげればいいのです。あるがままを受け止めてあげることです。

【平成19年8月1日】

